

「鏑木清方 幻の《築地明石町》特別公開」

会期：二〇一九年十一月一日―十二月十五日 会場：所蔵品ギャラリー10室(3階)

《築地明石町》との再会の悦び

根本章雄

現在五十歳未満の御方様は勿論のこと、五十歳超の御方でも《築地明石町》をじかに御覧になった方は少ないのではないだろうか。清方生前の頃はまだ目にする機会があったかもしれない。しかし戦後の昭和三十年代以降の公開はほぼ東京だけに限られておりましたから「註1」極く僅かなチャンスだった筈でございます。ましてや清方他界後に至っては、全くその姿がみえなくなっていました。それが何と清方歿後五十年という節目の年を間近に控えてそれにも間に合うように、かくれんぼから戻ってきてくれたのです。よって本当にこのたびの公開は待ちに待ったものになったのでございます。

鏑木清方《築地明石町》1927年
東京国立近代美術館蔵
©Nemoto Akio

もうそろそろ半世紀前のことになってしまいます。それは昭和四十六（一九七二）年に行われた銀座松屋の「鏑木清方展」のなか《築地明石町》は燦然と輝きを放った展示がなされておりました。身内の私でさえ鳥肌が立つほどの感動を覚えた記憶がございます。続いて清方歿後の昭和五十（一九七五）年の丸の内パレスビルにあったサントリー美術館がその後赤坂見附へ移る直前に開かれた「回想の清方 その三「註2」での御目見得が最後となって以来の公開となりますので、本当に久方振りになりました。

この間の、清方ファンの方々からは遺族の私どもの許にまで「見られないか」というお声は届いておりました。しかし、「個人蔵」でもそれは「作品の劣化」を防止することを第一に考えて下された結果であってそれは作品にとって必要かつ貴重な期間であったのだらうと思われるのでございます。

そうこうしてここに至ってやっと再登場が成ったのは、この永い間、行方知れずといわれた作品を仲介して下すった画廊の方、これをご購入、ご收藏下すったこちら様、そしてむろんお手放し下すった方を含めたご三者様のあうんの呼吸なくば今日の公開はまだ夢のなかであつたらうことは、想像に難くないところでございます。よって、ここにこれら方々のご努力のお蔭であつたことへ感謝の意を表すものでございます。

清方もこの再会を悦んでいることに間違いはなく、私には解るのでございますが、清方がいつもの穏やかな表情で、心の底からの笑顔でこのたびの公開にこぎつけて下すったあはるいはこれに関わって下すった皆様に対し感謝し御礼を申し上げている姿が……。更にここで遺族として特筆すべきは東京国立近代美術館様がこれもほぼ五十年近い間姿をみることの出来なかつた《新富町》《浜町河岸》ともども三点揃って「作品の散逸防ぎ」という意味合いも兼ねてご收藏下さいましたことに深く感謝申し上げる次第でございます。東京人清方の代表作の收藏場所としてこれ以上望むべきところはございません。

全くもつてその名の通り「箱入り娘」であつた《築地明石町》は素晴らしい「嫁ぎ先」へ収まり最高の「結婚」となった感がございます。私事になりますが、妹などはこの朗報を耳にしたその翌日には清方の眠る谷中の墓地へ報告にとんだくらいに当家にとつては大事なことでございました。

ここで生前の清方がのちになって表した詞がございましてので記しておきます。

居留地なる異人館の

垣に絡みて

まだ咲き残る薺なずなの

いと小さき花を
つけたり

築地の海は

雲母色の靄

深く立ち

こめて

朝冷えは膚に

沁む

袖かき合わせて

ふとかへり見る

いぎりす巻の女の瞳に

澄むや秋

紫陽花舎主人

余談になりますが私が子どもの頃、この作品を初めて観たときの第一印象、何処に目がいったかと申しますと、あの黒い羽織からチラリとみえる「赤」の色の鮮烈さに目をうばわれ「清方はこんな細部にわたってまで気を配るのだな」と当時思ったのをはっきりと覚えております。枯れて地におちた朝顔。ホテルから連想の垣根。遠く朝もやに霞む帆前船……。それがその後の清方の画をみるとき主は無論のこと、脇をみることにへの大切さを教えられたのがこの《築地明石町》でございます。私がこれまで胸にしまっておいた「清方の見方」を吐露したものでございます。

更にこの作品イメージをふくらませて下さった当のご本人、江木ませ子様の御令嬢妙子様（註3）が昭和のはじめパリに於いて、海を渡って展示されていた《築地明石町》をご覧になって「註3」異郷の地で思いがけず母に逢ったよう」と感想を下すつたやにも聞き及ぶこの作品も待ちに待っていて下さった皆様にご堪能いただけるような「保存の美しさ」が継続されたまま皆様の前へ再登場出来たことにも改めて御礼を申し上げます。

最後になりました。永い間お待ちいただいたファンの皆様方どうかごゆっくりと久々の「いぎりす巻」を目に焼きつけてお帰り下さいまし。

（鍋木清方孫）



江木ませ子氏肖像
安藤萬喜氏提供

おばあ様のこと

安藤萬喜

相州片瀬、いまの藤沢市に祖母江木万世は、お手伝いのかねやと静かに暮らしていた。ちょうど、二二六事件の起きた頃、私の父は、軍隊に入り、一歳の私を抱えた母は、東京から祖母の元に引越した。

畑の中の小高い丘の上に立つ家、庭を下って行くと林の中に沢の水が流れて、沢蟹が芝生まで登って来るような所だった。洋風の玄関を入ると、左に父の書齋があり、真ん中の廊下をばさんで庭側に座敷が二間と茶の間が並んであった。茶の間の前は、台所で裏庭に出られるようになっていた。五月頃には祖母といちごを摘みに出て、朝ごはんの時に食べたことを思い出す。台所の先には、渡り廊下があり、風呂場へとつながっていた。廊下の下の砂利には、時々、蛇の抜け殻があり、お守りだと大切にしまっていた。芝生の庭の中央には、花壇があり、バラやコスモスが植えられていた。祖母はコスモスが大好きだった。やがて、私に弟が生まれ、父は軍隊で家にはおらず、母は子ども二人を連れて、実家のある小田原へと引越すこととなった。私は、その後も、度々、一人で片瀬の祖母の所に泊りに行っていた。祖母の描いた草花が一面にある襖の茶の間で御飯を食べた。かねやと一緒に、江の島や由比ヶ浜に遊びに行ったこともよく憶えている。

祖母万世は三十五歳で未亡人であった。祖父定男は、江木家の一人息子で、実母を早くになくし、義母が悦と言い、祖母万世の長姉であった。姉の家に女学校時代からよく出入りしていた万世は、当時、御茶ノ水女学校の出身で、大変な美女ということでも、男子学生の間では評判であったらしい。やがて、定男と万世は相思相愛の仲となり、定男が帝国大学の学生であった二十歳で結婚し、万世にとって実の姉が姑となるやっこしい関係が出来た。定男は大学卒業後、官吏となり、農商務省に勤めた。定男と万世の間には、娘妙子と双子の男の子、文彦と武彦が生まれた。私は文彦の長女である。

やがて、アメリカ合衆国のサン・フランシスコで開催されたパンパシフィック万国博覧